

知求会ニュース

2023年4月

第85号

◎ 「アユス・NGO 新人賞」受賞、おめでとうございます！

修了生の**スティブ・ダハル**さん（国際交流研究専攻13期生）が、2023年3月16日に2022年度「アユス・NGO 新人賞」を受賞されました。

https://ngo-ayus.jp/project/event/22award_ceremony/

◎**修士課程、修了おめでとうございます！** 国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科 学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて修士（国際学）8名および多文化共生学プログラムにおいて修士（学術）19名が誕生しました。

◎最終講義対面およびZOOM オンライン開催

2023（令和5）年3月9日（木曜日）午後1時半から3時半まで、**佐々木一隆**先生の最終講義が5号館B棟1階教室において、対面およびZOOM オンラインで開催されました。演題は『英語・言語学・国際交流を求めて』でした。参加者はおよそ対面45名、ZOOM 40名でした。最終講義は宇都宮大学公式YouTubeチャンネルで見られます。

◎ 教職員人事異動

佐々木一隆国際学部名誉教授

佐々木一隆先生が、3月31日をもって定年退職されました。国際学部には1987年4月から36年の間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大変お疲れ様でした。

飯島透係長

飯島さんが、2022年10月1日付で農学部係長に異動されました。大変お世話になりました。なお、学術情報室から後任に**奈良橋真**係長が着任しました。奈良橋さんは過去に国際学部に在籍していたことがありますので心強いです。

◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞（令和4年12月4日）Globe+に、「共生と共感一壁を超えるコミュニケーション」と題して「他言語対応の連絡帳「共生」意識するきっかけに」の内容で**若林秀樹**先生（国際学部客員准教授）の記事が掲載されました。

2. 下野新聞（令和 5 年 1 月 13 日）3 面に、《足尾銅山閉山 50 年コーナー》で「宇大・セミナー」と題して、「草を食べた農耕馬が死んだ」「煙害で廃村 窮状語る」「松木村子孫、歴史を継承」の内容で高橋若菜先生（国際学部教授）らの「環境と国際協力研究室」の記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和 5 年 3 月 11 日）23 面に、「日本語講師を養成 小山市国際交流協会」と題して、神山英子さん（国際学研究科国際社会研究専攻第 7 期修了生・三重大学教育学部特任講師）の記事が掲載されました。
4. 下野新聞（令和 5 年 1 月 23 日）7 面に、《論説コーナー》で「とちぎ発 宇大足尾セミナー」と題して、「歴史的教訓 継承し生かせ」の内容で高橋若菜先生（国際学部教授）の記事が掲載されました。
5. 下野新聞（令和 5 年 3 月 11 日）23 面に、「宇都宮市人事異動内示 中規模の 1237 人 部長級は大幅増」と題して、「総合政策部長」の内容で篠崎雄司さん（国際学研究科国際社会研究専攻第 2 期修了生・行政経営部次長）の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞（令和 5 年 3 月 1 日）22 面に、《隣県コーナー》で「館林で宇大生や院生 13 人 足尾鉍毒被害、理解深める」と題して、田所莉沙さん(国際学部 4 年)と高橋この葉さん(国際学部 3 年)の記事が掲載されました。

研究室訪問 56 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「教養部から国際学部そして二つの研究科に所属した 36 年間：
宇都宮大学内で進む改組と人事異動の下 よき出会いに恵まれて」

佐々木 一隆

改組と人事異動の進行下での教育研究・組織運営・社会貢献活動

国鉄が民営化して JR が誕生した 1987 年 4 月 1 日に、私は宇都宮大学に講師（教養部）として着任しました。時代はまだ昭和で、国立大学は 2004 年の法人化以前の段階にあり、教員は教官と呼ばれる国家公務員でした。1994 年 10 月 1 日に（教養部の廃止にともない）国際学部が設置されて、私は卒業論文指導が可能となる国際学部配置換えとなりました。1995 年 4 月に国際学部の一期生（国際社会・国際文化の 2 学科）が入学しました。国際学研究科修士課程も順調に 1999 年 4 月 1 日に設置され、同研究科博士課程は少し年数を置きましたが、2007 年 4 月 1 日に設置されました。2017 年 4 月 1 日には国際学部で改組が行わ

れ、2 学科を 1 学科に再編統合して国際学科が設置されました。2019 年 4 月 1 日には地域創生科学研究科修士課程が創設され、国際学部の教員はグローバル・エリアスタディーズと多文化共生学の 2 つのプログラムに分属することとなり、国際学研究科博士前期課程の募集を停止しました。私の所属する多文化共生学プログラムは、国際学部と共同教育学部の教員がほぼ 1 対 1 であり、学生数も多いため大所帯となっており、教育研究指導体制が充実しています。さらに、2021 年 4 月 1 日には地域創生科学研究科に博士課程が設置されて現在に至っています。このため、国際学研究科は博士課程も募集を停止することになり、新研究科への移行はかなりの程度進みました。着任以来 36 年という長い年月の中で、私は何度も学部・研究科の設置や改組とそれにとまなう人事異動を経験しましたが、お陰様で大過なく定年退職を迎えることになりました。お世話になった皆様に、まずは心より感謝申し上げます。

宇都宮大学での 36 年間でふりかえると、学内では学部・研究科や事務の改組と人事異動が進み、学内外では学生や卒業生・修了生、学部の同僚や役員を含む大学職員、地域の人たちとのよき出会いに恵まれて、大学人としての教育研究、組織運営、社会貢献などの諸活動においても私自身の成長を追認することができたと言えます。もちろん、年齢や経験を重ねて業務量や責任が高まるにつれて、組織としての活動の意義や醍醐味が分かるなどのよい面がある一方で、過重な業務量や苦労が絶えないこと、中間管理職としての学部長の苦悩も少なからずあったことなどは否定できません。しかし、そうした苦い経験をはるかに凌ぐ形で、教育研究、組織運営、社会貢献などの諸活動において、それぞれの意義、醍醐味、楽しさ、やりがいを実感してきたからです。このため、本学での 36 年間は、基本的に実りある満足できる諸活動を続けてきたと断言してもよいと思います。

以下では、私の 36 年間の成長を「よき出会いに恵まれて」に焦点をあてて語ります。

私自身の成長：よき出会いに恵まれて

この節では、私の 36 年間で語るにあたり、その焦点としての「よき出会いに恵まれて」について、具体的には、①日本語研究、②米国 UCLA 言語学科での在外研究、③国際交流に関する諸活動、④田巻・佐々木両学部長時の組織運営、⑤とちぎ自主夜間中学と多文化公共圏センター 多様な学び研究会という 5 つの具体的事例により説明します。5 つの事例をつなぐキーワードは「国際交流」です。

具体的事例の説明に入る前に、私の専門分野と主な研究内容について紹介します。放送大学栃木学習センター『とちの実』2022 年 10 月号 No. 126 巻頭言（題目：「多様な学びを求めて：私の研究と教育」）p. 2 の冒頭の部分は分かりやすく、次の段落に引用します。

「私の専門は英語学と言語学です。主に英語と日本語を対象として、大学生の頃からことばの構造と機能に興味を引かれて研究してきました。その最大の理由は、身近で自明な存在でありながら、ことばを丁寧に観察してみると実に不思議であることを実感し、解明したいと思ったからです。これまでの私の研究は、英語における助動詞の配列順序や受動文

の多様性、内部構造と分布の観点からみた日英語の名詞句比較、英語・日本語・中国語の関係節の比較、英語の構造と機能の史的発達からみた英語圏文化研究、多文化共生における言語の重要性などが挙げられますが、その原動力は上述した理由にあります。」

① 日本語研究

国際学部の中で、日本語学の小池清治先生と日本語教育の梅木由美子先生に出会えたことは、私の教育研究活動に大きな影響を与えました。母語である日本語研究や日英語比較の重要性を実感して研究の幅を広げ、専門は英語学に加え言語学であると表明できるようになりました。小池先生からは『日本語学キーワード事典』などの仕事をいただき、私の「言語学入門」を日英語の複眼的視点と一般言語学の視座から講義することが可能となりました。梅木先生からは、日本語教育の内容と方法論を学びました。そして国際学部の教員は誰もが国際交流委員となるべきであるとお考えをいただき、とても印象的でした。また、ゲルガナさん、イヴォナさん、ユラさんなどの日本語・日本文化研修留学生からの影響も大でした。

② 米国 UCLA 言語学科での在外研究

UCLA 言語学科では客員研究員として 2000 年 8 月から 2001 年 6 月まで「現代英語の統語論と言語普遍性」について研究し、数多くの出会いがありました。教授陣としては統語論の Koopman、数理言語学の Keenan、文法発達の Hyams、統語理論や現代英語統語理論概説の Stowell の諸先生による授業を聴講させていただき、研究上の相談もしました。大学図書館での資料収集や読書、毎週金曜日に開かれた言語学科の研究会では、欧米だけでなく、アジアやアフリカなどの様々な言語を視野に入れた記述的・理論的な発表に触れる機会にも恵まれました。アメリカ言語学会にも参加して、学会の全体的な動向も確認することができました。こうした研究活動を通して、日英語名詞句構造に関する比較研究が深まり、言語多様性への関心もさらに高まり、言語学者としての色彩が濃くなったと言えます。

③ 国際交流に関する諸活動

特に UCLA での在外研究から帰国して以降、私は、学生の国際交流（受入、派遣、宇大の日常での交流活動）を推奨し、宇都宮大学国際学部・国際学研究科・地域創生科学研究科での講義・演習・研究指導を積極的に行ってきました。在外研究前に遡りますが、集中合宿方式の「英語会話」を高際先生や Lew 先生などと担当し、多国籍で多様な学生どうしの英語による国際交流活動にも携わりました。こうした中で、卒業論文、修士論文、博士論文の指導を通しての学術的な国際交流は、比較の視点にもとづき、相手の言語や文化を尊重することが可能となり、教員と学生が対等に議論できる点で極めて重要と考えます。指導教員として学位取得に寄与した卒業論文はおおよそ 110 本、修士論文は 41 本、博士論文 7 本あり、学生のみならず私にとっても学問的財産となっており、誇りに思っています。さらに、教育研究のための国際交流に関する組織運営活動（学術交流協定、事前交渉、締結、訪問、外国語臨地演習/海外語学研修、研究上の協力など）も、国際交流委員長、学長

特別補佐、国際学部長、あるいは一教員として積極的に行い、アメリカ、オーストラリア、チェコ、中国、タイ、ベトナムに出張しました。当時の進村学長先生のパラツキー大学訪問に際しては、私は学長特別補佐として（現在の学生支援課留学生・国際交流室の留学生係長をされている）石川さんとともに随行させていただきました。なつかしい思い出です。

④ 田巻・佐々木両学部長時の組織運営

田巻学部長時の2013～2016年度は、全国の大学で学部別にミッションの再定義が求められ、その再定義に基づいて国際学部は一学科への改組を申請して、大学設置審議会で認められました。これを受けて、佐々木学部長時の2017～2020年度は、改組の着実な履行が求められました。どちらも国際交流を重視し、多文化共生（社会）のための専門教育を軸に据えて、地域をめぐるグローカル化とグローバル化に対応し、複数外国語の運用能力強化とコミュニケーション能力や海外での行動力の育成に重点を置きました。特に多文化公共圏センターが主体となって学部と地域とをつなぐ事業や授業などが行われ、これまでに多くの新たな出会いが生まれています。

⑤ とちぎ自主夜間中学と多文化公共圏センター 多様な学び研究会

2021年8月にとちぎ自主夜間中学が開校し、2022年5月に多文化公共圏センター(CMPS)多様な学び研究会が発足して現在に至っています。研究会の目的は、国際学部などの関係者が集い、多様な学習者（義務教育未修了者、形式卒業生、学齢超過の外国人、学齢児童生徒等）に貴重な学びの場を提供する自主夜間中学等について研究を行うことにあります。すなわち、多様な学びの場について研究を行い、普及に資する教育相談や学習支援活動をすることです。自主夜間中と研究会には、多様な学びの場の一つとしての自主夜間中学という接点があります。そして、田巻さんが代表を務める「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」と私が代表の「多文化公共圏センター 多様な学び研究会」に、田巻宇都宮大学名誉教授が研究代表者となっている日本学術振興会科学研究費基盤研究 (A)「外国人生徒の多様な学びの場に関する研究—特別定員枠校と定時制・通信制高校の全国調査」の研究グループも加わって共催した、「自主夜間中学について考える連続研修会」第1回が2022年12月3日に、第2回が2023年3月11日に行われ、とちぎ自主夜間中学と多様な学び研究会とともに、実に多くの出会いが生まれました。なお、この3月に、上記科学研究グループの田巻研究代表者と佐々木研究分担者の共編による『外国人生徒の学びの場—多様な学び場に着目して』が、宇都宮大学国際学叢書第14巻として下野新聞社より出版されたことを付記します。

今後について

2023年3月末日で宇都宮大学を定年退職しますが、令和5年度には地域創生科学研究科多文化共生学プログラムの非常勤講師と放送大学栃木学習センター客員教授（非常勤）という形で教育研究活動を継続します。また、所属学会からの依頼で共著書の執筆を予定し

ていますし、数十年間続けてきた個人研究の成果をできれば単著の形で出版したいとも考えています。さらに、大学を離れた形での組織運営活動、社会貢献活動も続けていく所存です。今後ともよろしく申し上げます。

(2022年3月21日原稿受理)

博士録 62 第22号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「感謝とエールを込めて」

森下 順子

1. 博士論文要旨

表題：わが国のDV（ドメスティック・バイオレンス）被害者の現状と課題—男性被害者の検討—

- ① **研究目的：**本研究の目的は、日本の男性のドメスティック・バイオレンス（DV）被害者のうつ病関連症状に影響を与える要因について調査し、統計学的手法を用いて検討することである。
- ② **研究方法：**2021年2月25日または26日に、ウェブ上で直近の一年以内に配偶者およびパートナーによるDV被害経験のある日本在住の男性1,466名にアンケートを行った。アンケートでは、①属性(DV被害以外)の質問として、社会人口統計学的特性、過去のトラウマ体験、精神科既往歴に関する質問をした。また②DV被害に関する質問として、DV暴露の程度を評価するための質問紙(15項目)のDomestic Violence Screening Inventory (DVSI)、左記のDVSI以外の筆者らが作成したDV被害形態に関する質問票(20項目)を使用した。①と②について、うつ病関連症状を評価するために、評価尺度(10項目)の患者健康質問票(日本語版PHQ-9; Patient Health Questionnaire-9)を使用した。なお、本研究では専門家によるうつ病の診断は行わないため、参加者の方法、結果、考察を述べる際、うつ病という用語は使わず、うつ病関連症状または、うつ病関連症状レベルという用語を使う。①はCramérの相関係数を算出して、うつ病関連症状レベルと関連する変数を見出した。②は、Spearmanの順位相関係数を算出して、うつ病関連症状レベルと関連のある変数を見出した。①で見出した変数(年齢、パートナーまたは配偶者の就業状況、子どもの有無、学歴、離婚をしたいけれども子どものために思いどどまった、幼少期のDV暴露、学校でのいじめ被害の経験あり、過去・現在の精神科通院歴)を独立変数として、うつ病関連症状レベルのあり・なしを従属変数としてロジステック回帰分析を行い、一つにまとめて「DV以外」の共変量とした。②で見出した変数(配偶者またはパートナーは、家事・育児をまったくやらない、配偶者またはパートナーは、お金をむだに使ったり、不必要なものを使う、相手は、私に何かいやがらせをした)を独立変数として、うつ病の関連症状レベルのあり・なしを従属変数としてロジステック回帰分析を行

い、一つにまとめて「DV被害」の共変量とした。①と②のそれぞれの共変量を独立変数として、うつ病関連症状の評点を従属変数として重回帰分析を行い、その結果をパスモデルで示した。

- ③ **研究成果**：DV被害の程度（DVSIスコアの評点）では、参加者の5.4%に「緊急性があり、早期介入を要する、または緊急避難を要する」レベルの状態であることが明らかにされ、PHQ-9のスコアでは、研究参加者の10.7%に中等度から重度のうつ病関連症状の特性があったこともわかった。属性とDV被害の両方ともうつ病関連症状に影響を与えるが、属性のほうが直接に受けるDV被害よりもうつ病関連症状レベルに影響を与えていた。うつ病関連症状レベルに影響を与える属性の因子には「学歴（中学校卒業）、精神科通院歴あり、離婚をしたいけれども子どものために思いとどまった経験あり、幼少期のDV暴露あり、年齢18-49歳、子どもなし、学校でのいじめ被害の経験あり」があった。

うつ病関連症状レベルに影響を与えるDV被害の因子には、「配偶者またはパートナーは、家事・育児をまったくやらない、配偶者またはパートナーは、お金をむだに使ったり、不必要なものに使う、相手は、私に何かいやがらせをした」があり、研究参加者は身体的な暴力よりも精神的な虐待を受けることが多いとわかった。

- ④ **考察**：「幼少期のDV暴露」と「学校でのいじめ被害の経験」を含む過去のトラウマのイベントは、うつ病関連症状レベルの得点と有意に関連していた。これらのイベントは、うつ病に対する個人のレジリエンスを低下させることが報告されており、本研究結果においてもこれらのイベントがうつ病関連症状に影響を与えていたと考えられる。そのため、学校教育や福祉・医療・公的支援機関などの適切な場所で、子どもたちにDVやいじめをなくすための倫理教育を行うことは、成人後、うつ病を抱えるリスクを減らすことができるだろうと考えられる。

本研究では、特に、幼少期のDV暴露や学校でのいじめ被害の経験などの過去のトラウマ体験（ACEs）が、後のうつ病関連症状レベルに有意な影響を与えていた。これらの経験は、成人期においてうつ病の危険因子となるような長期間に渡る健康被害をもたらす可能性がある。日本では、男性被害者が利用できる支援はほとんどない。実際に日本では100ヶ所を超えるシェルター、各市町村に少なくとも1ヶ所のヘルプラインがあり、DV被害女性が利用できるが、男性用のシェルターは全国で5ヶ所以下、ヘルプラインは10ヶ所以下である（各都道府県管轄：データには示していない）。男性被害者のための適切かつ実行可能な支援体制の早期構築が望まれる。

- 1) 荒木剛 いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス（resilience）に寄与する要因について 2005; 14: 54-68.

- ⑤ **結論**：本研究の結果から、男性のDV被害は重層的な複雑さがあることが示唆される。被害者は、目に見える暴力よりも、目に見えない暴力に直面する可能性がある。男性被害者は、女性被害者とは違って男性被害者自身もつ属性と直接的な身体的暴

力被害というよりも配偶者の言葉や態度による被害がうつ病関連症状レベルに大きな影響を与えており、身体的暴力だけに注目した支援の提言では、男性被害者にとって不十分かもしれない。包括的な支援が早急に必要とされるだろう。

2. コメント

私は、長期履修制度を利用して2011年から4年間、宇都宮大学大学院国際学研究科国際文化専攻に所属しました。修士論文では発達障害児をもつ母親のストレスを国際比較し、わが国の母親たちが他国の母親たちよりも高いストレスを保持し、支援が必要であることを提示しました。多くの先生方に助けていただいてその論文を完成することができました。その後、民間の病院で働いておりました。数年後、私自身が病気になり仕事をやめ、また養母の介護をしました。毎晩午前1時か2時まで養母のお世話をする間、何もしないで隣にいるのは、もったいないと思いました。何かしたいという気持ちでいっぱいになっていた頃、自治医科大学医学研究科で博士課程募集の広告をみました。もう一度、修士の頃と同じように研究をしたいと思い、自治医科大学大学院医学研究科精神医学講座博士課程に入学しました。

自治医科大学大学院では、家庭内暴力における男性被害者に焦点を当てて研究をしました。研究をする際に、宇都宮大学大学院で学んだ知識や、精神論に大変助けられました。

知識では、モリソン先生がジェンダー論、英論文の構成、ブレインストーミング、批判的論理思考をご教示してくださいました。私は、ジェンダーに関する領域の研究者でありたいと常日頃考えていますが、モリソン先生が私に影響を与えてくださいました。中村真先生から統計ソフトの使い方や分析方法、心理学の観点から現象をみることを教えていただきました。教育学部の梅永先生から、英論文、ゼミ合宿、学会参加などあらゆる指導をしてくださいました。丁先生は、発表の方法、礼儀など教えてくださいました。例えば、テキストについて発表するときは、最低3回は熟読し、まとめ、資料を作成し発表すること、私は今でもその通りにしています。佐々木一隆先生から、考察では文献に書かれている事実に即して考えることを教えていただきました。

精神論では、中村先生から研究室に毎日足しげく通う（いつでも研究室にいたことが信用となるため）というご教示をいただきました。また、先生のお名前は失念してしまいましたが、論文執筆はうつ病になるくらい向き合うことをご教示いただきました。私は、うつ病になるくらい博士論文に取り組もう、うつ病になっても大丈夫だと思いました。なぜなら、私は精神科所属の学生なので、いつでも医師に診察していただけるからです。

以上のように、博士論文を書くことができたのは、宇都宮大学大学院国際学研究科や教育学部（現・共同教育学部）の先生方からいただいた知識や精神論のおかげです。今でも教えを守っています。現在は、自治医科大学の先生方に助けられて日々過ごしております。宇都宮大学大学院時代からつながって今があるのだと感じております。後輩の知求会のみなさまも、宇都宮大学大学院での日々が宝物になりますよう、またみなさまのご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

(国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻 第13期修了生)

(2023年2月24日・3月21日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 32 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「マダガスカルでの生活」

六川 彩水

2022年4月より、私はJICA海外協力隊としてマダガスカル共和国で生活しています。マダガスカルはアフリカ大陸の南東に位置する島国で、日本の約1.6倍にあたる約587㎢の国土に3,000万人弱が暮らしています。かつてはフランスの植民地であったことから、マダガスカル語と共にフランス語も公用語として用いられています。またマダガスカル人のルーツはマレー系であるという説もある通り、アフリカ大陸とアジア諸国の中間のような顔つきをしている人が多い印象です。

日本人にとっては、マダガスカルの印象といえばユニークな動植物ではないでしょうか。事実、マダガスカルにいる野生動物の70～80%は固有種といわれています。国内の保護区では、自由に動き回るワオキツネザルやカメレオン、並び立つ巨大なバオバブを見ることができます。またあまり知られていませんが、マダガスカルの日本語学習者数はアフリカ第3位です。首都にある大学には日本語学科も設立されており、街を歩いていると日本語で挨拶されることもしばしばあります。特に日本の漫画やアニメは非常に人気があり、これらをきっかけに日本語を学び始める人も多いようです。

そんなマダガスカルですが、GDPは第131位、GNIは第191位と、世界的にみても最貧国の一つです(2021年時点)。新生児死亡率は約20%、5歳未満児の死亡率は約50%にものぼり、中でも母子保健の改善は大きな課題の一つとなっています。私も協力隊として県の栄養局という機関に配属され、母子の栄養改善のために活動しています。マダガスカルでは、各地区に妊産婦及び5歳未満児の身体測定を毎月行う施設が設置されています。日本で例えると、妊婦健診や乳幼児健診を行う施設といえば分かりやすいでしょうか。これらの施設では地域のボランティアさんたちが働いており、私も彼ら/彼女らを活動のパートナーとして、お母さんたちへ栄養価の高い食材を用いた料理のレシピを紹介したり、栄養に関する研修を実施したりしています。マダガスカルには新鮮な野菜や果物も多く流通していますが(地域差はありますが)、それらを購入するための十分な収入がないお母さんたちも多くおり、問題の解決は簡単ではないと日々痛感しています。ですが、私が紹介

したレシピが一つでも家庭に並び、母子の栄養改善に僅かでも貢献できればと願っております。

2023年4月でマダガスカルでの生活を始めてから一年となり、協力隊としての任期も半分が過ぎようとしています。2023年11月頃にはマダガスカルでは大統領選挙が控えており、活動が思うように出来なくなる可能性もあります。そうしたことも踏まえ、悔いの残らないよう、残りの任期も現地の人々と共に自分が出来ることを少しずつ実践していきたいと思います。

(国際学部国際社会学科 第19期卒業生)

(2023年2月10日原稿受理)

海外留学今昔 32 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 22 知求会ニュース第41号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「2022年国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会での準優勝」

2022年度 藤井広重研究室所属 横山 友輝

2022年12月10日(土)と12月11日(日)に、赤十字国際委員会(ICRC: International Committee of Red Cross)主催の国際人道法模擬裁判大会・ロールプレイ大会国内予選が開催され、宇都宮大学チームが、両方において準優勝の成績を収めました。宇都宮大学チームとして、模擬裁判大会に菊地翔さん(国際学科4年)と鈴木ひとみさん(同4年)、Hagiya Corredo Magda Yukariさん(同3年)、ロールプレイ大会に私と榊原彩加さん(地域創生科学研究科1年)、Hagiya Corredo Magda Yukariさんが出場しました。私たちはいずれも、藤井広重先生のご指導の下で国際法や紛争後平和構築の研究を行っている学生たちです。藤井研究室として、本大会への挑戦は、4回目で、ようやく念願の入賞を果たすことができました。この場をお借りして、皆様にその成果報告と、私たちの活動についてご共有させていただきます。

私たちが出場した国際人道法模擬裁判大会・ロールプレイ大会は、紛争下における「文民の保護」や「民用物への攻撃の禁止」といったルールを規定する国際人道法を用いて、議論を行う大会です。模擬裁判大会では、裁判の形式で、出場チームによる弁論と国際人道法の専門家の方々が扮する裁判官からの質問への答弁が、いかに論理的か、説得的かなどによって点数がつけられ、順位付けされます。決勝戦の対東京大学戦では、それまでの戦いとは異なり、裁判官から厳しい質問が複数投げかけられ、良い緊張感をもって戦うこ

とができました。一方のロールプレイ大会では、私たち参加チームが、紛争下の人道支援で活躍する赤十字国際委員会の職員として、仮想の紛争地域を訪れ、紛争当事者らとの交渉を行い、その場の立ち居振る舞いや国際人道法への理解度が点数化されます。紛争当事者は、必ずしも国際人道法を順守する意思を持っているわけではないため、「なぜ国際人道法を守る必要があるのか」、「国際人道法を守ると紛争当事者にどのような利益がもたらされるのか」といった情報を駆使して交渉に臨みました。どちらの大会も英語で行われ、アドリブ力も試されるものであったため、私たちにとっては自らの力を試す非常に良い機会となりました。

本大会は、毎年行われているものですが、同じ人はそれぞれの大会に3度以上出場することができません。私は、模擬裁判大会にはすでに2回出場していたため、出場資格がなく、ロールプレイ大会についても、すでに一度出場していて、さらに、今年度が卒業年度であったため、今年の大会が文字通り最後の挑戦となりました。そのため、他のゼミ生や国際人道法を新たに勉強し始めた学部1・2年生の学生の皆さんの協力をいただきながら、チームメンバー全員で準備から力を入れて取り組みました。今にして思えば、練習の段階で、学年に関係なく、忌憚なく意見を言い合い、全員が良いチームを作り上げようと取り組んだことが結果につながったのではないかと思います。たくさんの練習を経て、チームのメンバーが、それぞれの得意・不得意を認識し、それらを補完し合うための自らの役割を認識して、組織的に本番に臨むこともできました。また、コーチである藤井先生から、様々な国際人道法に関わる議題やニュースなど、数多くのヒントをいただきました。もちろん、優勝できず、世界大会へ駒を進めることができなかつたのは悔しかったですが、準優勝という結果でもって藤井先生にわずかながら恩返しできたことが私にとっては本当に嬉しかったです。

ご指導賜りました、藤井先生、大会出場メンバーのサポートをしてくださったゼミ生、1・2年生の皆さん、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、この度、知求会への寄稿という大変貴重な機会をいただけたことに、大会出場メンバーを代表して感謝申し上げます。

(宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻 第2年次在学学生)

【参考 URL】

以下 URL にて、国際人道法模擬裁判大会・ロールプレイ大会への出場や子どもの人権ワークショップ（詳細は HP 参考）を行う、宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター・国際平和と人権人道法研究会のホームページと、宇都宮大学ホームページ・赤十字国際委員会ホームページに掲載された大会の結果報告ページを掲載いたします。

●国際平和と人権人道法研究会 HP（宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHP より）

<https://cmps.utsunomiya-u.ac.jp/peace-and-human-rights/>

●2022 年国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会の成果報告（宇都宮大学 HP より）

模擬裁判大会：<https://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/education/010183.php>

ロールプレイ大会：<https://www.utsunomiya-u.ac.jp/topics/education/010178.php>

●2022 年国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会国内予選の結果報告（赤十字国際委員会 HP より）

<https://jp.icrc.org/information/ihl-competitions-report-2022/>

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。

「教職について」

佐々木 哲夫

昨今、「働き方改革」で耳目を集めている教職ですが、校種によって、また勤務校が置かれた状況によって勤務内容が異なります。現在の小学校では、学級担任がほとんどの教科を担当します。また、中学・高校は教科担任制なので、自らの専門教科のみを教えているのですが、学習指導や生徒指導、進路指導、さらには部活動指導と、様々な業務に従事しています。私は高等学校の教員なので、拙稿は高校教員の視点を中心となることをご容赦ください。

業務内容については多くの方が既にご存知のことと思いますので、日頃私が考える、高校教員に求められることについて述べていきます。まずは何よりも、「経験」です。読者の皆さんが魅力的だった教員はどのような方々だったのでしょうか。通り一辺倒のことや、理想論しか述べない教員は、魅力的でしょうか。むしろ「この人、何だか分からないけど他の人と違う経験していて、面白そうだ」という方のほうが、人間的に魅力的ではなかったのでしょうか。留学や地域貢献、研究はもちろん、「失敗」も大切な経験の一つです。人生で大きな失敗がないまま教員になると、躓いている生徒への共感的理解ができない場合があります。ぜひ、色んなことにチャレンジし、失敗から多くのことを学び、魅力的な人間に成長されることを期待します。

また、「積極性」も必要です。知的探究心に溢れることはもちろん、様々な人と積極的に交流し、人脈を広げていくこと、経験を高めていくことで、生徒に接する際の「引き出し」が増え、相談や指導の際、大いに役立つことがあると考えます。

余談ですが、進路指導をしていると、教職を目指す生徒が大きな勘違いをしていることに気付かされます。それは、「高校は教えることが難しいので、中学校の教員になりたいです」ということです。先々の見通しを立てることができずに目の前の授業だけで精一杯になってしまうと、生徒が高校に入学してからかなり苦勞します。私もそういった生徒の進路指導をする際に、十分に気をつけねばならないと痛感しています。

なお、従来は業務すべてを教員が行っていたのですが、近年は外部の方を招聘し、業務の一部をお願いすることがあります。よく知られているのは部活動の「外部指導員」「部活動指導員」ですが、近年では「ICT支援員」という方もいらっしゃいます。生徒に1人1台のタブレットが配付され、そのサポート業務等を担当して頂いています。また、私の勤務校では昨年度より「進学型単位制」が始まりました。各学校の特色を強く打ち出すために、従来の「普通科」よりも選択できる授業が大幅に増え、生徒1人1人が自らの進学に適した科目を選択します。例えば、今までの文型では選択しにくかった地理を選択できるようになったり、英語系の授業を多く選択できるようになりました。さらに、学習指導要領に含まれておらず、学校が独自に設ける「学校設定科目」もあり、それらを組み合わせて卒業に必要な単位の修得を目指します。いわば、従来の普通科高校と大学の中間の存在とも言えるかもしれません。

教員は学習指導要領や学校の指導方針などの枠内で職務を行わねばなりません。一方で、授業展開の独自性や業務の効率化など、裁量に任される場面も多々あります。私は「教育は国づくり」だと思っております。ぜひ、皆さんの貴重な経験や知識を子どもたちに還元し、ともに学び合いながら未来を作っていきませんか。

(国際学研究科 修士課程 国際社会研究専攻 第5期修了生)

(2023年3月20日原稿受理)

フォーラム 2023年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

執筆者の都合により掲載を見送ります。

国際学部学位授与式から

国際学部

- ・成績優秀者 1名
セキ ブンカン

2022(令和4)年度より、学位記授与式において国際学部長から表彰する賞が設けられました。なお、学部長は中村真先生です。

- ・国際学部長賞 2名
 - ① 菊地 翔 団体賞 (藤井研究室)
 - ② 鈴木さとみ 団体賞 (藤井研究室)

2013(平成25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・最優秀論文賞 1名

- ① 本多恵 「子どもの貧困が放課後活動に与える影響と支援の考察」 栗原研究室

・優秀論文賞 3名

- ① 木津谷亜美 「現代的「手仕事」のもつ意義—『カーサ ブルータス』(2000-2022)に着目して—」 松金研究室
- ② 渡邊奈々羽 「結婚式が映し出す日本社会—家族主義から個人主義、そして多様な価値観へ—」 丁研究室
- ③ 伊藤いろは 「インドにおける性的な人身取引の実態と被害者支援のあり方」 阪本研究室

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん（国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）の変更になりました。

今回の第 15 号の内容は、1. ご挨拶 2. お知らせ 3. 寄稿 4. タイの昨今（第 15 回） 5. 新年度特別企画 もう一度行きたい東南アジアのあの場所～東南アジア支部メンバーお薦め旅案内（タイ・インドネシア編）～ 6. トコロ変われば★談会（第 8 回）あなたの地域の“22 年度 3 大ニュース” 7. 連載コーナー 狙えインスタ映え！？ アジア取材雑記第 11 回 “カンジュルハン”を忘れない 8. 連載コーナー ～懐かしの一枚～ ともに感じる東南アジア（第 11 回）絶海の孤島に広がる大自然 です。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 45 号の内容は、1. イタリア 新型コロナ対策の非常事態宣言の終了で進む規制緩和 2. EU 支部だより **—あれから1年—**です。

編集者のひとりごと

●桜の開花が例年より早かったことで、季節感のずれが肌を感じられます。また、新型コロナの非常事態宣言が緩和され、あらたな生活様式が摸索されながら、生活に定着するのでしょうか？いずれにしても、人と人が対面で会えることが待ち遠しい日々です。

●近頃、街を散策していると解体中の建物を見かけます。また、空き地が増えているところが目に付くようになりました。土地遺産相続がスムーズにいかないせいでしょうか？後継者がいなかったためでしょうか？何か目に見えない新陳代謝を感じます。

●近所にあった栃木県土地開発公社の跡地がマンションに開発されはじめました。母校の小学校では、少子化のために私が知っている 1 学年 4 組から 1 組に減少しています。この開発で子どもの入学者が増えることを願っています。子どもたちの元気が、未来を開くと思っています。少子化対策はまちづくりにおいても重要課題です。

●バブルがはじけて東京から宇都宮に帰郷してから、日本赤十字社の献血を続けてきました。貧乏でも、何か人に役立つことはないかと考えた末のことでした。献血者は 69 歳までという採血条件なので、3 月 30 日までが採血最終期限でした。3 月 29 日に 180 回目の採血卒業を迎えました。日本赤十字社の皆様、永い間お世話になりました。

●今年の 4 月から 1 年間は自治会の班長の仕事があります。久しぶりの担当ですが、以前の時からどのように変化し、どんな課題があるのか確認していきたいと思います。おそらく、少子化にともなう、空き家問題と新たな家族関係などでしょうか。私自身を含めて、一人暮らしの高齢者問題も考えていかなければならないでしょう。当班にも介護を受けている未加入の高齢者がいます。どのように、地域で防災時に支援していくのか対応策を考えておく必要があるではと考えています。他の自治会ではどのようにしているのでしょうか。同窓生で自治会長経験者の方は、ご教示いただければありがたいです。

●国際学研究科同窓会は「Think Global, Act Local」をスローガンにしていますので、まさに前述の問題などもこの視点に立って考えるべきかも知れません。何か新たな知見を得られればと目論んでいます。昨今は SDGs の課題もあり、広い視野から課題解決を模索する必要があります。

●3 月 31 日は統一地方選挙が告示されました。早々と無投票当選者が報道されました。議員のなり手がいないそうです。昨今の IT は深化しています。スマホで検索すると「選挙ドットコム」というサイトが見つかりました。政治家情報が簡単に調べられます。選挙時の判断材料になるでしょう。併せて、新聞紙の情報で再確認することも必要です。

●今年の誕生日（3 月 31 日）に古希（満 70 歳）を迎えました。新たな気持ちで、豊かに、楽しく、生きていくためには健康と体力が必要だと思っています。また、若い人に触れ合うことも重要だと感じています。「病は気から」とよく言われますが、気力・体力・知力を維持し続けることも肝要だと考えています。日々、精進しなければなりませんね。皆様はどのようにお考えでしょうか。また、どのようにお思いでしょうか。何かコメントがあれば、お教えいただければありがたいです。皆様のご健康を祈念しています。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com